



ナウマンゾウの大腿骨

(*Palaeoloxodon naumanni*: パレオロクソドン・ナウマンニ)

約 50 万年前

345mm×70mm

ナウマンゾウの大腿骨の一部。左大腿骨内側が割れ落ちた部分と考えられる。ナウマンゾウは、およそ 50 万年前から 2 万年前まで生息したゾウの一種で、北海道から九州にいたるまで、日本列島各地でその化石が発見されている。多くの臼歯化石が石器とともに見つかる長野県の野尻湖がとくに有名だが、瀬戸内海<sup>の</sup>海底からも、底引き網の漁網にひっかかって水揚げされる事例が知られている。本資料も 1962 (昭和 37) 年 12 月に香川県高松市の小槌島<sup>こづちじま</sup>の沖、北東約 1 km の水深 30m の海底から、カキ漁にともなって発見されたものである。当時の新聞には、「ナウマン化石・高松沖で発見」という見出しで、その様子が詳細に報告されており、これによると、大腿骨だけではなく、長さ 5 cm ほどのナウマンゾウの牙片や臼歯片、前足の骨片、そしてシカの角など多くの化石と一緒に引き上げられたようである。ナウマンゾウが生きていたころ、本州と四国は陸続きで、現在の瀬戸内海には広大な陸地が広がっていた。そこには多くの動物が生活し、ナウマンゾウにとっても安住の楽園であったことが想像される。しかし、列島各地に生息したナウマンゾウも、やがて絶滅を迎えることとなる。旧石器人による狩り尽くし (オーバー・キル) が絶滅を引き起こしたという考えも根強くあるが、一方で、地球全体が最終氷期最盛期 (最寒冷期) を迎えた時期と絶滅のタイミングとがほぼ一致することから、気候の寒冷化が絶滅の要因であったと理解する研究者も多い。真相のほどはわからないが、人類がナウマンゾウを目の当たりにしていたことはまちがいないところである。



〈図1〉

〈新聞掲載写真〉

〈図1〉: 左大腿骨の内側 (斜線で示した部分が発見された)

〈写真〉: 一緒に発見されたその他の化石

1. 前足の一部
2. 牙片
3. シカの角
4. 臼歯片